



6年「生き方教室」

2月3日（木）6年生では、キャリア教育の一環として「生き方教室」を行いました。看護師、警察官のお仕事をされている方を講師に招き、お仕事の内容について、詳しくお話をいただきました。働くことは苦勞も多い反面、とてもやりがいのあることだと感じてくれたと思います。



入学説明会を実施しました

2月4日（金）に、4月に入学を迎える児童の保護者の方を対象に「入学説明会」を実施しました。説明は、南小の概要、保健関係や給食について、入学へ向けての準備、諸連絡など、多岐にわたりました。また、算数セットや鍵盤ハーモニカの販売も行いました。保護者の皆様には、お忙しい中、ご参加いただきどうもありがとうございました。



「南小芸術展」が開催中です

2月開催予定だった「玉村町子ども芸術展」が感染症予防のため中止となったので、出品する予定だった児童の書き初めや図工の作品を、1階の多目的ホールや廊下に展示しました。どの作品も上手で、子どもたちも興味深く見に来ています。お互いに鑑賞し合い、それぞれの作品の良さに気づき、自分の作品作りに活かしてほしいですね。



おらせ

新型コロナウイルス感染者が依然多く「まん延防止等重点措置」の期間も延長されたことから、2月25日（金）に予定していた「6年生を送る会」を延期し、3月中旬にTV放送（各学年とも動画による発表）にて実施することとしました。また、3月4日（金）に予定していた6年生の親子行事は中止とさせていただきます。「コサージュづくり」については、児童だけで実施する予定です。何卒ご理解のほど、よろしくお願いいたします。

優しさと思いやりのある子どもに育てるためには？

「思いやり」とは、他者の視点に立って気持ちを考えられることを指し、発達段階的には4歳をすぎたころから少しずつわかっていくと言われていきます。思いやりは、もともと持ち合わせている性格だけではなく、日々の生活の中でも育むことができるものです。とは言え、教育さえすれば必ず身に付くものでもありません。そこで、思いやりの心を育てるために、どのようにお子さんと接すればよいのか、ポイントをご紹介します。



◆まずは保護者がお手本になる

お子さんに思いやりのある子になってほしいと願うのであれば、まずは保護者がお手本になる行動をすることが近道となります。例えば、乗り物で高齢の方に席を譲ったり、重たい荷物を持つ手伝いをしたりする、保護者の何気ない様子を、お子さんはよく見ているのです。見ず知らずの人に対しても親切にすることが、人間関係の中では必要なのだと、次第に学んでいくことでしょう。お子さんもお手伝いできる状況の時は、一緒にお手伝いさせてみていいかもしれません。

◆親子の絆を深める

お子さんの心が育つためには、親子の絆が、いかに深まっているかということが重要です。一緒にたくさん遊んだり、ご飯を食べたり、今日あった出来事をお互いに話したりすることも、お子さんの心に響くできごとのひとつになります。

◆前向きな口調を意識する

お子さんと会話する時には、普段から命令口調ではなく、「〇〇しようね」と前向きな表現にすることを心がけましょう。保護者が、関わる人に対して親切に対応することで、お子さんも真似しながら覚えていきます。相手に親しみを感じてもらえる口調で、お子さんにも話しかけてあげてください。

◆きちんと言葉で伝える

もし、お子さんがお手伝いをしてくれた時には、「ありがとう」「〇〇ちゃん・〇〇くんのおかげで助かったよ」などと、感謝の気持ちを伝えてあげましょう。手伝ってもらった結果、どう思ったのかを伝えることで、自分ではない相手がどんな気持ちになるのかを想像できるようになっていきます。人間が抱く感情を、少しずつ覚えていってくれるでしょう。

◆植物などのお世話をお願いする

お花にお水をあげたり、ペットなどの生き物のお世話をしたりすることが、思いやりを育てるために役立ちます。お花もペットも人間ではなく、会話をすることはできません。しかし、言葉が通じなくても誰かを必要としていることを、次第に想像、理解できていきます。命を大切に育て、お世話をすることで思いやりの心を育てていけるのです。

◆読み聞かせ

絵本の読み聞かせをするのも、思いやりを育むためにはいいことです。お子さんは物語を聞きながら、主人公と同じ気持ちになることで、喜びや悲しみなど、さまざまな気持ちを感じるようになります。また、ただ、上手に読むのではなく、物語に登場する人物などの気持ちを親子で話し合ってみることも大切なポイントになるでしょう。この子はこう思ったのかな？と、想像する力がついていきます。

◆褒める

お子さんが誰かに優しくしたり、思いやりの心から行動したりした場面を見たら、たくさん褒めてあげましょう。「この行動はいいことなのだな」と理解し、繰り返すことができるようになります。また、ほかのお子さんが親切にしている様子を一緒に目にした場合は、「あの子、あそこがよかったね」と話し合うことも、思いやりを育むことに役立ちます。

自分が経験したことがない気持ちを想像するのは、難しいことです。だからこそ、お子さん自身が自分の気持ちに共感・尊重してもらった経験や、自分は大事な存在なのだ実感することが、人を思いやる心につながるのではないのでしょうか。お子さんの一番身近な大人である保護者が、思いやりのある接し方をするよう心がけながら、親子で一緒に優しい心を育てていきましょう。
(以前の「南小だより」から再掲)